

教科体育におけるスポーツの在り方

— 究極性を具備する体育・体育的スポーツ観を基礎にして —

Future Direction of Sport in School Physical Education

— Based on The ultimate image of physical education and its relation to sport —

廣 橋 義 敬

Gikei HIROHASHI

1. 緒 言

NHK『小朝が参りました』に出演した百歳おじいちゃん・おばあちゃんの逞しい美しい姿には驚嘆させられる。筆者らには、スポーツ型体育観とは縁遠い、生活の知恵によって行われてきた生活・生存型体育実践の『権化』をそこに見る思いがする。究極性を具備した体育、そのなかでの体育的スポーツ（体育運動）の在り方の象徴的なイメージには、『これら超高齢者の大往生型長寿にさえ一段と寄与すること』があげられよう。

大学体育が必修に価するとの評価を外部から受けられなかった直接的原因是、研究者でもある担当者が一般の期待に応え得る大学体育の理論的・実践的確立を怠ってきたことにあったとみられる。中・高等学校段階の教科体育にも、現状にとどまるかぎり、週休二日制の完全実施に伴う授業時間数の制約が引き金になって、同じような評価の下されるおそれがある。

筆者らは、このような現状を踏まえその打開を目指し、根本的見直しが迫られている教科体育の現状を表1にまとめてみた。ここに示す根本的見直しが迫られているとみられる象徴的ともいえる四つのことのうち、特に、表1中の②最近の児童・生徒の体力低下などの原因になっている体育目標を見失った体育科教育の流行、③の週休二日制の完全実施を契機に変革が迫られている教科体育に注目する必要がある。教科の体育が表中②で示すような現状にとどまり、しかも週休二日制の完全実施を契機に授業時間数が減らされるようなことになると、児童・生徒に及ぼす体育的效果は一段と低下されることが憂慮されよう。

このような現状を打開するためには、二つの基本方策が必要になる。その一つは、外部からその重要性が評価されるような指導内容、指導法になるように現状を根本的に見直すことである。他の一つは、教科体育の授業時間数を増加させないまでも少なくとも減らさないようにすることである。このためにも第一の方策が不可欠になる。

注1 これらの根本原因は、筆者らには、わが国のみでなく国際的にみて体育・スポーツ学界が、一般に既成のスポーツ中心の、しかも体育とスポーツとの区別さえもあいまいなスポーツ型体育観にこだわり、個人的社会的にみて望ましい平和ないきがいがある生き方に積極的に寄与できる体育・体育的スポーツを確立しようとしてこなかったことにあったと考えられる。そこで、これらをまとめ教科体育の見直しに関連する根本的課題として表2に示してみた。ここでは、教科体育の根本的見直しをする上で、その前提条件として欠くことのできない根本的課題になると考えられることを三つあげた。その第一は、①体育・スポーツ・保健などのとらえ方・在り方などに見られる混迷・曖昧などの打開ということである。体育とスポーツ、体育と

表1 根本的見直しが迫られている教科体育の現状

- | |
|---|
| ① 一般に、必修に価するとの評価が大学の内外から受けられなかった大学体育の実績 |
| ② 最近における児童・生徒の体力低下などの原因になっている、体育目標を見失った体育科教育の流行 |
| ③ 週休二日制の完全実施を契機に変革が迫られそうな教科体育 |
| ④ プロ・プロ的スポーツの体育的スポーツへの影響、など |

表2 教科体育の見直しに関連する根本的課題

- | |
|--|
| ① 体育・スポーツ・保健などの捉え方・在り方などにみられる混迷・あいまいなどの打開 |
| ② 人間の生涯のわたる生活・生存（個人的・社会的にみて望ましい幸福な生き方）に不可欠な寄与をする体育観、そのなかでの体育的スポーツ観 |
| ③ 児童・生徒の成長・発達、生活・生存などに不可欠な寄与をする発育期体育観、そのなかでの発育期体育的スポーツ観、など |

保健, などにおける相補的關係を考えての共通理解の得られる区別が, 真に効果的な体育を確立するうえで重要である。その第二は, ②人間の生涯にわたる生活・生存に不可欠な寄与をする体育観, その中での体育的スポーツ観の確立を図ることである。その第三は, ③児童・生徒の成長・発達, 生活・生存などに不可欠な寄与をする発育期体育観, その中での発育期体育的スポーツ観の確立である。この課題は, ②の課題を発育期に焦点を併せて追究する必要がある。外部から高く評価される教科体育を確立するには, 体育についての発想転換が必要であることを示している。^{注1}

本研究の目的は, 人間の生活・生存に寄与する体育, 特にそのなかでの体育的スポーツに関するこれまでの研究成果を基礎にして, 教科体育におけるスポーツの発展的な在り方を追究することにある。

2. 研究方法

本研究では, 第一に, 教科体育におけるスポーツ(体育運動)の根本的な在り方を, 筆者らが長年にわたって研究して得た体育・体育的スポーツ観を基礎にして, 主に演繹的考察によって追究していく。

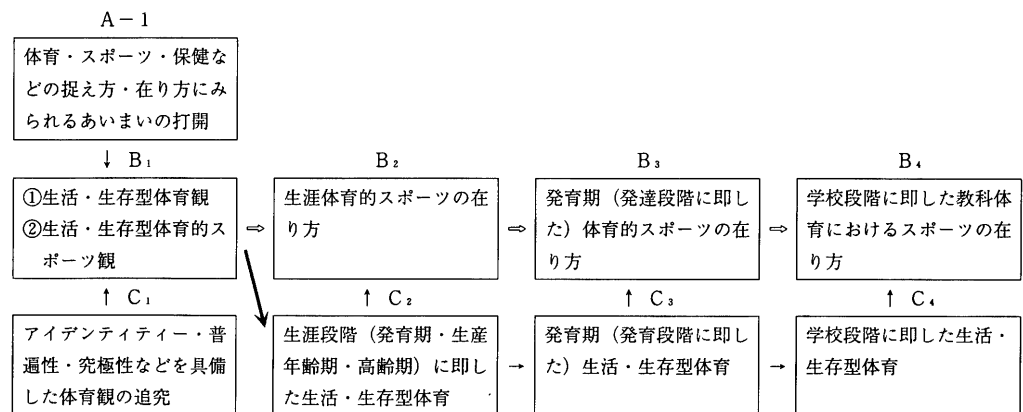
わが国のみでなく国際的にみて, 今日なお支配的になっているスポーツを手段にするスポーツ型体育観, 運動・栄養・休養の三本柱の手段による健康・体力型体育観に対して, 筆者らは活動・栄養・休養の三本柱の手段による最も広いとらえ方をし, アイデンティティー・普遍性・究極性などの基本的条件を備えた『究極の体育』とも言える生活・生存型体育観, そのなかでの生活・生存型体育的スポーツ観を提唱してきた。^{注2} この体育観における『生活』とは, 個人的社会的にみて望ましい生き方を体育的方法によっても積極的に図っていくこと(生きがいがある生き方)を, 『生存』とは, 人生に伴うおそれのある各種の災害を体育的方法によっても予防・克服していくこと(平和な生き方)を指している。

本研究では, 第二に, 教科体育におけるスポーツの現状に即した発展的な在り方を, 現行学習指導要領, 学校スポーツの全体, 現代社会におけるスポーツの多様化などと関連づけるようにして追究していく。

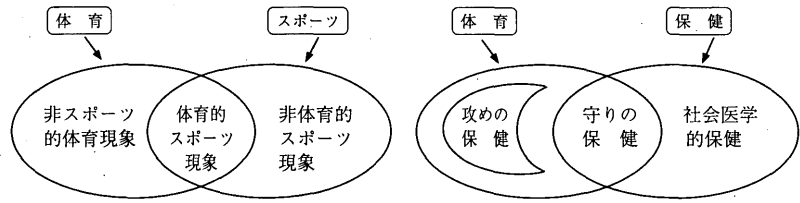
表3は, わが国を含めて国際的にみられる諸体育観を大きく三種類に分類して示したものになっている。表中の活動・栄養・休養の三本柱による人間の生活全体にわたる現象としてとらえる「生活・生存型体育観」は, 筆者らの提唱している体育観であり, こ

表3 わが国にみられる諸体育観

体 育 観		主 な 特 徴
1 スポーツ型体育観	(1)レジャースポーツ(レクリエーションスポーツ)型体育観 (2)競技スポーツ型体育観 (3)求道スポーツ型体育観 (4)健康・体力づくりスポーツ型体育観 (5)一般体育的スポーツ型体育観	①スポーツ(体育運動)実践の重視 ②生活の一部になる現象
2 健康・体力型体育観	(1)健康型体育観 (2)健康・体力型体育観	①運動・栄養・休養の三本柱 ②健康の維持・増進の重視 ③生活の重要な部分にかかわる現象
3 生活・生存型体育観	生活型体育観 人間形成型体育観	①活動・栄養・休養の三本柱 ②個人的社会的にみて望ましい生き方のできる能力・態度育成の重視 ③生活全体にわたる現象



の体育観では、①のスポーツ型、②の健康・体力型を包み込む極めて広いとらえ方をしている。一方、図1は筆者らの教科体育のスポーツの在り方の演繹的考察チャートをまとめ示したものになっている。図のA. B. Cに示すように、この体育観は、①体育とスポーツ、体育と保健をめぐる曖昧さが打開でき、しかもアイデンティティー、普遍性、究極性などの具備を目指した体育観になっている。図2は、生活・生存型体育観を基礎にして、体育の独自性（アイデンティティー）を、体育とスポーツ、体育と保健とのそれぞれにおける相補的關係を考察した上での区別を示したものになっている。注2



(1) 体育とスポーツとの相補的關係

(2) 体育と保健との相補的關係

図2 体育のアイデンティティー

表4 『究極の体育』※①、②

具備すべき基本的諸条件	目 的	手 段	現 象
①アイデンティティー ②普遍性・類型性・個別型 ③究極性	①個人的・社会的にみて望ましい平和な生き方 ②個人的・社会的にみて望ましい生きがいがある生き方	①全生活事象の体育手段化 ②平和な生き方、生きがいがある生き方に寄与する体育手段	①全生活過程の体育化 ②体育を通しての平和な生きがいがある生き方

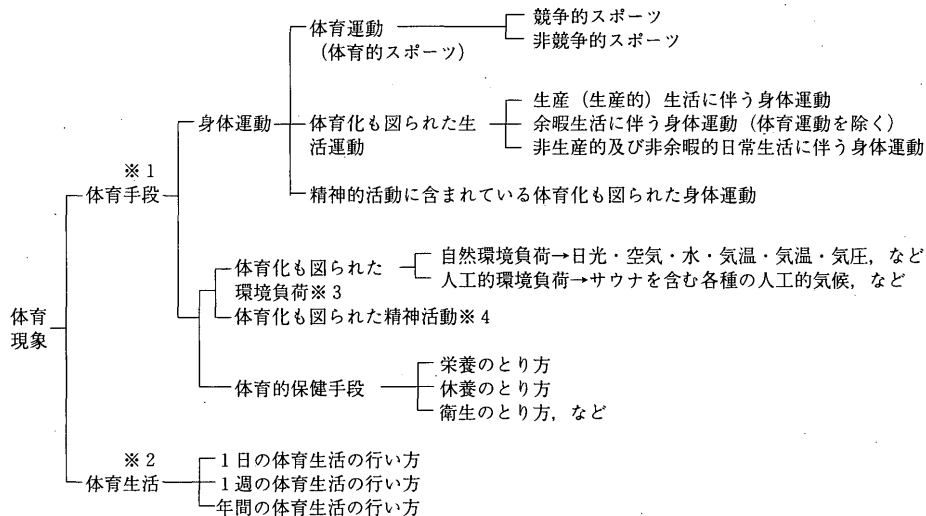
※①体育は主に身体的なこと（正確には身体的精神的なこと）を通して、個人的社会的にみて望ましい生き方のできる人間の身体的精神的育成を図る、生活全体を設計・統御する現象である。

※②体育には知育・徳育ではなく心育が対応する。

学研究には、主に体育的スポーツの体系的確立が期待されている。表4に示す生活・生存型体育観は、究極性を具備したとらえ方をめざしていることから、ここでは「究極の体育」と呼び直しその骨子を示した。また、表5は、この究極の体育の「実践的全体像」がイメージできるように示したものになっている。さらに、図3には、生活・生存型体育を基礎にした体育的スポーツの体系的確立のための研究チャートを示し、体育的スポーツが具備すべき諸基本的条件になっていることをあげた。ここに示した諸基本的な事柄は、それ自身が生活・生存型体育におけるスポーツの在り方を示すものになっている。教科体育のためには、図中④の生涯段階の中でも発育期における段階に即した体育的スポーツの確立が期待される。注3

本研究では、この体育観を基礎にして、教科体育におけるスポーツの在り方を演繹的ともいえる考察の流れの中でとらえ、その上で現状に即した発展的な在り方を示すことにする。

表5 『究極の体育』の実践的全体像



※1 主に身体的なことの全て。

※2 生き方に即して、生活全体の体育化を図ること。

※3 環境負荷は体育的保健手段としてもとらえられる。

※4 精神活動は身体的なことでもあることから体育手段としても位置づける。

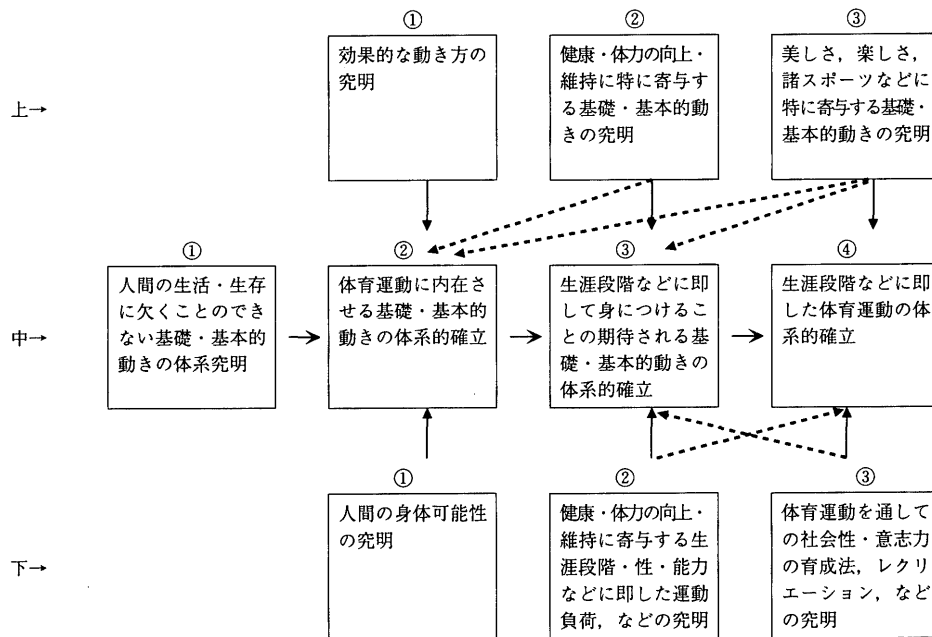


図3 生活・生存に寄与する体育運動（体育的スポーツ）の研究チャート

3. 研究成果

(1) 教科体育におけるスポーツの根本的な在り方に関連して

究極性の具備をめざす生活・生存型体育観を基礎にすると、体育的スポーツの根本的な目的・使命には『生涯段階に即した個人的社会的にみて望ましい平和な生きがいのある生き方、換言すると生涯を通して人間の生活・生存に絶えず効果的に寄与していくこと』があげられる。

そこで、教科体育におけるスポーツの在り方を究極性の具備を目指す体育・体育的スポーツ観を基礎にして追究した成果について以下に述べてみる。

今日、生涯スポーツという用語は一般に一種目のスポーツに親しみ、その技能を習得し、生涯にわたって実践するという意味に使われている。このような使われ方は、実は人間の生涯にわたる身心の変化として現れる生涯段階を無視した考え方に立ったものであって、非常に偏狭なとらえ方になっている。そこで、筆者らは教科体育におけるスポーツの在り方を究明するためには、まず生涯スポーツの生涯段階に即した基本的な在り方を、究極性の具備を目指す体育・体育的スポーツ観（生活・生存型体育観）を基礎にして検討することにした。その検討結果をまとめ示したものが表6である。

表6 体育的スポーツの生涯段階に即した基本的な在り方

在り方をとらえる視点	発育期スポーツ	生産年齢期スポーツ	高齢期スポーツ
1. 生産的生活に着目して	学習生活の全体を目指すバランスで効果的にするのに役立つ	生産生活の全体を目指すバランスで効果的にするのに役立つ	生産的なことにも親しみ、日常生活を自力で行うのに役立つ
2. 身心の能力に着目して	身心にわたる全面的発育・発達を重視する	健康及び生産的活動力の維持・増進を重視する	身心の老化、活動力の低下などを遅らせることを重視する
3. 生涯段階に即した幸福な生き方に着目して	発育・発達段階に即した安全な生きがいがある生活に役立つ	生産年齢段階に即した安全な生きがいがある生活に役立つ	高齢期の老化段階に即した安全な生きがいがある生活に役立つ
4. 各種スポーツの組み合わせに着目して	多種目によるバランス型	少種目または多種目によるバランス型	少種目または多種目によるバランス型

ここでは、体育的スポーツの生涯段階に即した基本的な在り方をとらえる視点としては、1. 生産的生活、2. 身心の能力、3. 生涯段階に即した幸福な生き方、4. 各種スポーツの組み合わせなどがあげられる。そこで、それらの視点について発育期、生産年齢期、高齢期のそれぞれに着目して基本的な在り方を検討し示した。

教科体育におけるスポーツは、生涯段階に関連づけると発育段階、学校段階に即した体育的スポーツになる。具体的には、第一には、生産的生活に着目すると、児童・生徒の学習生活の全体をめざすバランスで効果的にするのに役立つようにすることがあげられよう。第二には、身心の能力に着目すれば、身心にわたる全面的な発育・発達を重視することがあげられよう。第三には、生涯段階に即した幸福な生き方に着目すれば、発育段階に即した安全ないきがいのある生活に役立つことがあげられよう。第四には、各種スポーツの実践にあたってはその組み合わせ方が重要になるが、ここでは各種目によるバランス型が基本的在り方として望まれることになる。

(2) 体育科における指導内容のとらえ方

体育的スポーツに関することが、教科体育における指導内容の全体の中に、実践的にはどのように位置づけられたらよいのかの検討結果をまとめ示したものが表7である。

体育科における指導内容は、大別して表に示すように体育手段と生活全体の体育化の二つに区分することがその指導効果を上げる上で有効である。体育手段としては、①体育的スポーツ（体育運動）、②体育化も図られた生活運動、③体育化も図られた精神活動、④体育的保健手段（栄養・休養・衛生の図り方）があげられる。

体育運動については、各種体育運動の行い方、各種体育運動の体育生活への取り入れ方、諸体育運動の全体としての体育生活への取り入れ方が具体的内容としてあげられる。

しかも、生活・生存型体育実践の指導では体育的スポーツ（体育運動）は、次に示す体育化も図られた生活運動の上乗せ効果が期待できるように、計画的に取り入れることが重要になる。

体育化も図られた生活運動は、表に示すようになによりも各種生活運動の体育化の図り方、各種生活運動の体育生活への取り入れ方、諸生活運動の全体としての体育生活への取り入れ方が具体的内容になる。

体育化も図られた精神活動については、各種精神活動の体育化の図り方、各種精神活動の体育生活への取り入れ方、諸精神活動の全体としての体育生活への取り入れ方が具体的内容になる。

体育的保健手段については、各種体育的保健の図り方、各種体育的保健の体育生活への取り入れ方、諸体育的保健の全体としての体育生活への取り入れ方が具体的内容になる。生活全体の体育化としては、一日、一週の体育生活の中に生活運動を含む体育的スポーツ生活として計画的に内在させることが決め手になる。特に、児童・生徒の学校生活の実態に合わせるために、開校時の体育生活の行い方、長期休暇中の体育生活の行い方、受験期の体育生活の行い方などを具体的に示す必要がある。

(3) 体操の体系的なとらえ方

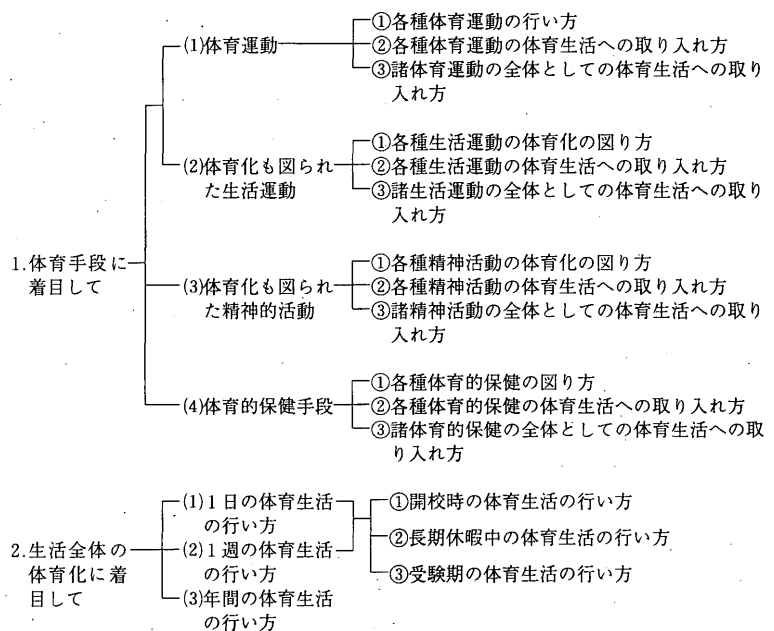
一方、現行学習指導要領に即しながらも生活・生存型の体育的スポーツにもなるようにするためには、特に体操領域の指導内容の工夫、改善が重要になる。

表8に示すように、その第一には、体力づくりをその主なねらいにするほかに、生活・生存に寄与する基礎・基本の動きが身につけられるよう配慮していくことが期待されている。その第二には、体操を広くとらえ、表中の「体操性」として示したことを重視していくことが期待される。

このような体育運動の中核的指導内容ともいえる体操は、①体操による体力の向上・維持の図り方、生活活動

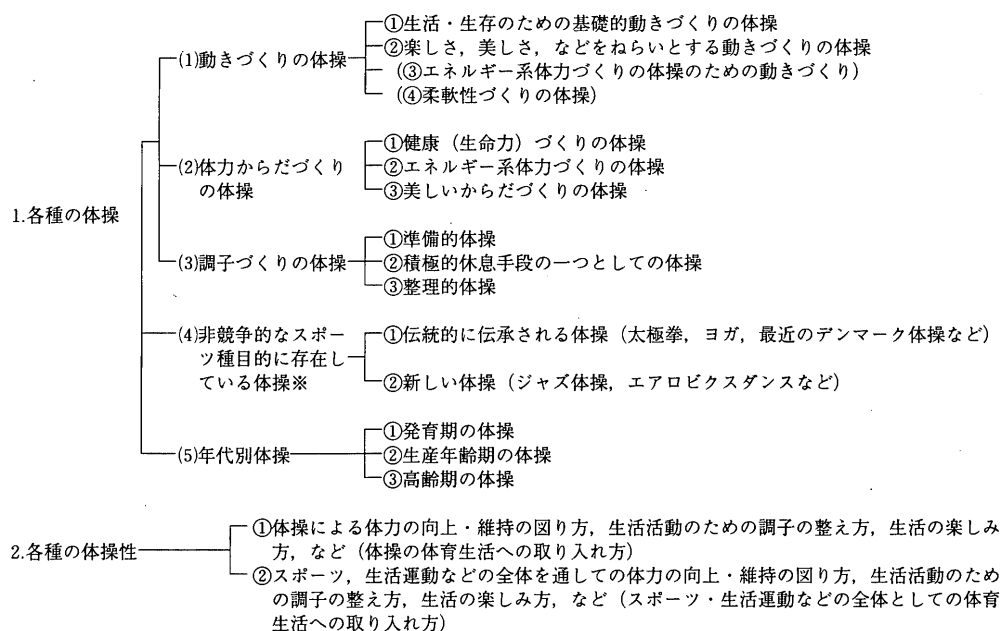
表7 体育科における指導内容の捉え方

— 体育手段、体育生活を柱にして —



のための調子の整え方、生活の楽しみ方、など（体操の体育生活への取り入れ方）と②スポーツ、生活活動などの全体を通しての体力の向上・維持の図り方、生活活動のための調子の整え方、生活の楽しみ方、など（スポーツ・生活活動などの全体としての体育生活への取り入れ方）があげられる。

表8 体操の体系的なとらえ方



※ 非競争のスポーツ種目に存在している体操の中に含まれている運動は、主なねらいに着目すると動きづくり、体力づくり、調子づくりなどのいずれかの体操に含めることもできる。

4. 結論的示唆

以上の考察結果から結論ともいえる事柄をまとめ示したものが表9である。発展的な在り方を考える視点としては、まず現状に即した発展的な在り方を考えるのに基礎になることをも追究することが必要になる。

ここでは、生活・生存型体育観を基礎にして、まずその前提条件になることとして、どんな基本課題を取り上げることが必要であるかを示した。その第一

表9 教科体育におけるスポーツの現状に即した発展的な在り方

発展的な在り方を考える視点	発 展 的 な 在 り 方
1. 現状に即した発展的な在り方を考えるのに基礎になることに着目して	(1) 生活・生存型体育観を基礎にした、発育（学校）段階に即して体系的に整えられた体育的スポーツ _____ × × × _____ (2) 絶えず全面的体力づくりのできる、発育段階に即して体系的に整えられた体育的スポーツ (3) 生活・生存に寄与する基礎・基本の動きが発育段階に即して身につけられるように、体系的に整えられた体育的スポーツ (4) 各種スポーツの体育的特性を基礎にした類型化、など
2. 生活・生存型体育観を基礎にした、現状に即した内容の改善に着目して	(1) 発育（学校）段階に即した全面的体力づくり、基礎・基本的動きを身につけること、などの最重要視 _____ × × × _____ (2) 体操領域内容の拡充 (3) 体操領域以外の指導内容の多角化 (4) 生活運動の体育化に関することの重視 (5) 体操以外における体操性の重視 (6) 類型差，個人差に即した体育的スポーツ生活の重視 (7) (1)に示した成果を効果的にあげるための指導内容の選択基準，など

の課題には、(1)生活・生存型体育観を基礎にした発育（学校）段階に即して体系的に整えられた体育的スポーツを確立することがあげられる。第二、第三、第四の課題としては、(1)の基本課題を具体的な課題としてイメージできるように、その中の主なこととして、(2)絶えず全面的体力づくりのできる、発育段階に即して体系的に整えられた体育的スポーツを確立すること、(3)生活・生存に寄与する基礎・基本の動きが発育段階に即して身につけられるように、体系的に整えられた体育的スポーツを確立すること、(4)各種スポーツの体育的特性を基礎にした類型化を図ること、などが発展的在り方の方向になると考えられる。

当然のことながら、筆者らの提唱している生活・生存型体育観を越えた究極により近い体育観、体育的スポー

ツ観を追究することは、永遠の根本的課題にすべきであると考えられる。

次に、生活・生存型体育観を基礎にした現状に即した内容の改善になることをも追究することが必要になる。その第一の課題には、(1)発育（学校）段階に即した全面的体力づくり、基礎・基本的動きを身につけること、などを最重要視することがあげられる。最近における楽しい体育の流行は、ここに示したことの軽視、さらには無視にさえなっているとみることができよう。第二、第三、第四、第五、第六の課題には、(1)で取り上げた基本課題を実際的な指導内容の中での発展的な取り上げ方にとって重要だと思われる基本的なことを取り上げた。その主なこととしては、(2)体操領域の内容を拡充すること、(3)体操領域以外の指導内容を多角化すること、(4)生活運動の体育化に関することを重視すること、(5)体操以外における体操性を重視すること、(6)類型差・個人差に即した体育的スポーツ生活を重視すること、などがあげられる。さらに、現行の学習指導要領に示されている選択基準的なことは、各運動の体育的視点からの特性が配慮されていないことから、実質的には選択の基準になっていない。したがって、真の選択基準になるような基準をつくるには、その前提条件として表中1－(4)に示してあるように、各種スポーツの体育的特性を基礎にした類型化が必要になってくる。いわゆる(7)、(1)に示した成果を効果的にあげるための指導内容の選択基準を確立することが重要になる。

参 考 文 献

- 1) 金原 勇・廣橋 義敬；学校体育論（原理編），建帛社，1991
- 2) 金原 勇・廣橋 義敬；究極の体育－アイデンティティー・普遍性を具備した体育観の追究－，体育原理研究第25号，pp71～74，1995
- 3) 廣橋 義敬；体育教育と人間形成，清和研究論集第2号，pp157～176，1995